

協同組合の新たな意義と大学生協：国際協同組合年に向けて

大学生協連会長理事 庄司興吉

1 前回理事会 7月24日以後

全国各地からお集まりいただき、有難うございます。7月の理事会でお話ししからあとのことについて、話させていただきます。7月26日から29日にかけて、韓国の大学生協との交流がありました。ソウルで開催されたので、それを機会にソウルの5つの大学と大学生協を訪問してきました。韓国では、生協法ができて、これから大学生協が新しくできる可能性がある、さらには大学生協の連合会もできる可能性があるということで、向こうで頑張っている人たちと交流し、日本側から役に立てることがあれば、という趣旨の意見交換でした。

また、2009年12月に国連総会で2012年を国際協同組合年とすることが決まりました。それに向かって、第1回の実行委員会が8月4日に開かれました。日本協同組合連絡協議会JJCが中心になってつくった実行委員会です。このあと、PCカンファレンスが8月の7日から9日にかけて、仙台で行なわれました。

2 予想以上に厳しい生協維持・生協づくり

最初に韓国での生協づくりについてですが、一言でいうと、生協維持、生協づくりは予想以上に厳しくなってきました。韓国はすでに高度に経済が成長しています。そのなかで、これまでにできた21の生協のうち、光州の朝鮮大学は日本のに近い形で1981年の民主化直後につくられたのですが、そのあとにつくられたところはいずれも苦戦していて、全学生と全教職員が一緒になってつくる形になっていないところが多いのです。そういう状況にもかかわらず、生協法が通ったので、これから新しい生協をつくるか連合会をつくるという話が起きているわけです。

たとえば、ソウルのセジョン大学。数年前に訪れた時には、わりと良い状態で交流できたのですが、今回行って見たらたいへん厳しい状態になっていました。新しい経済情勢のなか、大学が生協にたいしても生じた剰余を全額納入するよう要求していて、生協が苦戦しているのです。これからも生協はつくられていくとは思いますが、日本の大学生協のようにはいかないでしょう。高度に経済が発展してしまうと、大学がそのなかで国内的にも国際的にも競争していかなければならない。そういう状況のなか、生協が事業として利益を上げていたら、その分は大学に貢献せよといった要求が出てきてしまうのです。

日本の大学生協は、皆さん良くご存知のように、第二次世界大戦後の焼け野原で食うや食わずの時期に、生協が大学の食や文房具などを支えるしかなかったという条件のもとにつくられた。そういう日本の経験では、韓国の大学生協の実情はまったく理解できません。大学の福利厚生をどういう形でやっていくかということについて、それを担うのが大学生協でなければいけないとか、大学生協がいちばん良いとかいうことをいうためには、よほどきちんとした裏づけをもってきちんとした論理でいかなければならないのです。

これまでなんどもいってきましたが、アメリカでは、各大学が寮とか食堂とかを自分の事業としてやり、教科書その他の物品販売だけを外部の業者に任せる、というやり方が一般的です。ヨーロッパでは、それにたいして、ドイツやフランスの例が典型ですが、過去の歴史があり、学生支援機構のようなものが政府の保護を受けて、あるいは政府機関として、学生を参加させながら、寮・食堂・奨学金その他学生支援にかんすることを一括してやっています。そういうアメリカやヨーロッパの例と比較しても、日本では大学生協がいちばん良いのだ、だからアジアの諸国も日本の例を見習ってほしいとは、簡単にはいえない状態になっているのです。

そういうことにわれわれがどう対応していくかが非常に重要な課題になってきています。それが私の今日の話の第一の背景です。

3 高速度情報化社会のなかでの大学と生協

そのうえで、PCカンファレンスのことに進みましょう。昨年のこの会議での私の発言を思い起こしてください。私はかなり興奮していましたが、お手元にあるのは、感情的なものを排除した客観的な記録です。私はPCカンファレンスについてかなり厳しいことをいいました。その関係もあって、今年のPCカンファレンスも、最初から主要なところはだいたい出てみました。

結論からいうと、大学生協から出ている人たちの努力もあって、いろいろと改善が施されてきています。予算面でも生協の負担分が減らされているし、内容的にも、生協にかんすることが、シンポジウムやいくつかのセッションのなかに入るようになってきました。そのことについて、評価すべきところは評価しなければいけない、とレセプションの挨拶でもいいました。それでもまだいろいろな不満があるので、つい挨拶が長くなり、響きを買ってしまいました。

そのうえでいうと、一般的には、基調講演の一つにあったように、インターネットの巧みな利用が進んでいます。最近の若者たちのインターネット利用の実態をみると、圧倒的に電子媒体がコミュニケーションのメディアになってきていて、紙媒体の時代は急速に終わりつつあるという実感がしてくる。多くの人が感じていると思いますが、それが圧倒的な現実でしょう。大学の図書館も10年ぐらいのうちに不要になるだろうといわれています。

そのうえでさらに、最近の若者たちのメディア行動を見ると、グーグルとかヤフーとかいう大手検索会社に依存するようなスタイルから、ツイッターとかSMSとかのソーシャルメディア、つまりインターネットを利用して自発的につくられたコミュニケーション・メディアに依存する形に移行してきている。私も学生たちの動きを見ていて感じていたのですが、予想以上にそういう傾向が進んでいることを知らされました。

しかも、今年のPCカンファレンスの良かったことの一つは、それをふまえてコミュニケーションとはそもそも何なのかということ、教育の基本はコミュニケーションなわけですがそれはもともと何なのかということ、つまりコミュニケーションの本来のあり方を問い直すために、無着成恭さんという、昔「山彦学校」で有名になった人を招いて、TBSが戦後のある期間おこなっていた子供電話相談室でのやり取りなどをつうじて、探求しようとしたことだと思います。

コミュニケーションとは何なのか、型にはまった知識を教え込むのではなく、子供たちから自然に出してくる疑問にどう反応し、どうコミュニケートして、教えるべきことを教えていくか、ということをもう一回見直そうとした。これはなかなか良かったと思います。この話を聞くために、平行しておこなわれていた生協が中心となるシンポジウムに私は出られなかったのですが、聞く所によると、そちらのほうはPCカンファレンス全体の主題からすこし外れてしまって、ぴったりこなかったということで、それはそれで、PCカンファレンスに大学生協連がこれまでのようなコミットメントを続けていくとして、どうかかわるのかを今後なお検討しなければならないということでしょう。

これが今日の話の第二の背景です。

4 協同組合の新たな意義

そういうことを踏まえたうえで、協同組合の新たな意義についてです。このあいだの理事会でもいいましたが、2009年の12月に国連総会で2012年を国際協同組合年とすることが決められました。その決議の趣旨を見ると、社会経済開発、食料安全保障、金融危機対策などをつうじて、協同組合の意義と役割が見直されてきている。そういう期待に応えて、協同組合がこれからの社会にどう対処していくかを考えなくてはならない。そういう趣旨で国際協同組合年が設定されたようです。

私はこれを解釈して、さらに次のようにいいたいと思います。世界が全体として市民社会の方向へと動いている。それを今日までリードしてきた大金持ち市民（ブルジュワ）の事業が法人化して、今日の世界経済を動かしている。それが、金融経済をつうじて仮想経済を膨らませ、世界経済を混乱に陥れているのです。しかし、他方で市民社会化の他の面として、労働者、女性、被抑圧民族などの力によって市民民主主義が普及してきて、ますます多くの国民国家が市民民主主義でコントロールされるようになってきています。

これからは、混乱を引き起こすブルジュワの事業は、民主的に統制された国家の連合体の力で規制していかざるをえないでしょう。現にG7とかG8とかいわれていたものが、2008年の金融危機以降はG20という形になってきている。これまでのところそんなに成功しているとはいえませんが、端緒は現れてきているのです。私はそれを国際ケインズ主義と呼んできた。一度は廃れたケインズ主義が国際的な形で復活してきているといえるからです。そういう規制をしないと世界経済の混乱は抑えられないということが、しだいに認識されていくことになるでしょう。

それにもなって、すなわち市民民主主義の普及にもなって、普通の市民（オーディナリ・シティズン）の起こす事業、普通の市民が協同出資して民主的な運営でおこなっていく事業——その典型的な形が協同組合だと思うのですが——を発展させていく必要性が、国際的にあるいは世界的に認められ始めた。私はそれが、国際協同組合年設定の背後にある重要な事態なのではないかと思うのです。

もちろん、協同組合いがいのNPOやNGOなどとの連携も重要です。それも含めて、このあいだの国際協同組合年にむけての第一回実行委員会では、これを機会に協同組合憲章をつくらなければいけないのではないかと、という意見が出されました。19世紀前半のイギリスで、労働者たちが自分たちを選挙に参加させろと、人民憲章を掲げてチャーティスト運動を展開し、それが今日の市民民主主義の基礎になった。それを念頭において、協

同組合の憲章をつくるべきだということです。

これから議論になると思いますが、日本には協同組合がいろいろありますが、それらについての政府の対応も縦割りではらばらです。アジア諸国の多くは、協同組合省のようなものを持っていて、一貫した対応をしています。日本と韓国は遅れている。中国はもっと遅れていて、協同組合については政府の対応が問題化するところまでもっていないので、東アジアの遅れは深刻です。そのなかでも比較的に進んでいる日本が、その面でのイニシアティブを取っていくことが大事な局面になってきているのです。

5 各種協同組合のなかでの大学生協

そういう背景のなかで、各種協同組合のなかの大学生協をどう考えていったらいいでしょうか。日本の協同組合の多くは、日本社会の市民化以前につくられました。日本社会の市民化は、第二次世界大戦後、新しい憲法ができて、男女平等の普通選挙が実現していき、定着するのに何十年もかかっています。農協とか漁協とか、広く見れば大学生協も、日本国憲法が定着して日本社会の市民化が進む以前に、つくられました。

そのために、協同組合には、市民の事業などという意識はあまりないのです。農協などはむしろ、戦後日本の食糧生産と保守体制維持のために利用されてきた、という人もいますでしょう。多くの協同組合がいわば上から組織化されました。農協のような協同組合組織が巨大化して、幹部の利害と特定政党の利害が一致し、長く続いた保守政権を持続するのに役立ってきた、という面も否めないでしょう。

しかし、これも政権交代で前提が崩れてきています。その意味では今がチャンスです。農協以外の協同組合の多くも同じような問題を持っているはずですから、今がチャンスです。また、地域生協の多くは、安保闘争後の社会運動の戦線拡大運動のなかでつくられたもので、当初は反体制的、社会主義的なイデオロギーに強く影響されていた面がありました。しかしその後、日本生協連などは大規模化するにつれていわば企業化してきました。最大の流通業としての日生協などといっていますが、協同組合なのですから最大の流通業だけでは困るのです。

そういうなかで、大学生協は福武所感いらいの路線転換をつうじて発展してきました。1970年代までは大学生協も、戦後日本の政治的雰囲気の中で、社会主義イデオロギーや学生運動のイデオロギーに強く影響された面がありました。それが、福武書簡以来の路線転換を踏まえてイデオロギー依存から抜け出し、日常の市民の事業として発展し続けてきたのです。それを明確に理論化して、意味づけていくのが私の立場です。

そういう趣旨から、今までも、ビジョンとアクションプランをつくったり、ほかにもいろいろなことを申し上げてきました。しかし、実をいうと、これにはかなり根本的な問題が関わっていました。大げさにいうと、歴史観の再建のようなものに関わっていたのです。そのことに少しだけ触れさせてください。

6 歴史観の再建

まずわれわれは、マルクス主義の限界を明確に指摘しなければなりません。なぜなら、マルクスの時代には、イギリスですらまだ市民民主主義は実現していなかったからです。19世紀の終わりにようやく男子の普通選挙に近いものが実現して、晩年のエンゲルスがそ

の可能性に気づきました。そして、エンゲルスのもとで指導を受けたベルンシュタインというドイツの社会主義者が、それを本国に持ち帰り、男子普通選挙が実現していたなかで新しい運動を展開しようとした。しかし、修正主義として批判をうけ、その後ロシア革命が成功したことで、すべてが流されてしまいました。

その後、第一次世界大戦後のワイマール体制下で、カール・マンハイムという社会学者が、完全に普通選挙が実現していたドイツで、知識層の果たす役割が非常に大きくなってきたことをふまえ、いわゆるインテリゲンチヤ論を展開します。基本的民主化の進む社会で、インテリゲンチヤがいろいろな考え方をまとめていき、社会のあり方・行き方を決めていくのに貢献することを期待したのです。他方イタリアでは、ほぼ同時期にグラムシが現れ、活動のために捕まってほとんど牢獄で生涯を過ごしながら、マンハイムのいうインテリゲンチヤを、一般の労働者にも広げていく理論として有機的知識人論を展開しました。

その後、第二次世界大戦後になると、世界中で植民地解放が進み、その多くが最初は軍事独裁化するものの、やがて民主化されてポストコロニアルの時代に移ってきます。その過程で、中国もある時期から現実主義路線を取るようになり、ソ連はペレストロイカに失敗してやがて崩壊してしまい、世界全体の社会市民化の条件が整ってきました。そのなかで、妨害をするものが無くなったとして思い切り勝手に振舞った大金持ち市民の事業が失敗し、金融危機を引き起こして世界を混乱させてきたというのが現実なのです。

したがって、上に述べたように、民主的にコントロールされた国民国家の連合で国際金融資本を規制していく動きが必要であるし、そう進まざるをえないと私は思っています。それにとまって、市民的事業つまり普通の市民の事業としての協同組合を発展させ、その領域を拡大していく必要性がますます高まってきていて、その意味で協同組合の新たな意義が大きくなってきているのです。だから大げさにいうと、われわれの歴史観の見直しそのものから、大学生協の新しい意義づけをしていかなければなりません。

7 大学生協の役割

大学生協は、これまでの歴史を総括し、自分自身の存立意義を自覚して、協同組合の時代——21世紀はそういう意味では協同組合の世紀です——をリードする立場に立てるかどうかが、という状況になってきています。

大学は、地球市民社会化の進むなかで市民を養成し、市民のリーダーを養成するところとしての役割を、ますます強めていかなければなりません。そういう場における生協、つまり大学生協の役割は非常に大きい。大学生活の基礎を支えていくだけでなく、学生たちに協同組合、つまり協同の事業を経験させ、そこで育った者たちがそのあと社会のいろいろな場で活動できるようにしていく。そういう役割が大きいのです。

そういう意味で、学生のように市民になろうとする者たちに、そのための実践として、自分たちの事業で自分たちの生活と勉学と研究を支えていくようにさせる、そういう意義が非常に大きくなってきている。そのことをつうじて、たんなる労働者になるのではなく、自ら市民として事業を興せる人間に成長していくことが必要なのです。現在では、就活というのは、どこかに雇われて労働者になるための活動です。その中身が変わってこなくてはならない。

今日も、岩手大学の藤井学長や玉副学長にお会いして、いろいろな話をしてきました。

そのなかでも触れたのですが、ヨーロッパ・北部イタリアの例を挙げると、学生時代に協同組合活動をした人たちが、その事業を卒業後も続けていって社会的に定着し、いわゆる社会的協同組合を展開している。そういう活動が社会的経済を支えている。そういう動きが進展しています。日本ではまだ、労働者協同組合も法制化されておらず、そのほかの法整備もいろいろ遅れています。長い目で見ると、学生をそういう方向に導いていくことが必要になってくる。

就活を大学生協もいろいろサポートしているのですが、就活というところから大きな企業に雇われて働くための活動なのだというのではなく、自分たちが場合によっては事業を起こしていく。たとえば、インドネシアの協同組合関係の大臣などが、事業家精神とか企業家精神を学生のなかに育てていくのが大事だ、と公然と語っている。そういう起業精神、業を起こす精神をこれから学生のなかに育てていくためにも、大学生協が果たす役割はますます大きくなっていかざるをえないのです。

そのために、私たち自身が大学生協の新たな性格と役割を自覚しなければいけない。この間の例でいうと、戦後の大学生協の思い出集の刊行などをおこなってきましたが、ある時期までの大学生協には、「闘う大学生協」という意識が非常に強く、学生運動や革新運動の一環という意識が強かった。市民の事業、市民が自発的に起こす事業をおこない、市民になっていく学生にそういう芽を植え付けていって、そういう面から社会を変えていくのだという意識はなかった。そういうことをわれわれが明確に自覚し、学生、教職員、生協職員にも自覚させて、協同組合時代のリーダーとして大学生協運動を発展させていくことが必要です。

国際協同組合年実行委員会のなかにも、理論的なことを言える人は多くありません。いろいろな協同組合の指導者が集まっており、なかには生活クラブ生協の人などのようにけっこう意見をいう人もいますけれども、全体として協同組合の新たな役割とか、協同組合の時代になってきたのだ、とかいう人は少ない。その意味で、大学という知のセンターで協同組合をやっているわれわれの役割は、非常に大きくなってきているのです。そういうことを皆さんにも自覚していただき、生協をやっている教職員・学生・それから職員にもぜひそういう意識を強く持っていただいて、これからの生協の活動を展開していただきたいと思います。

このあいだも、T大で専務が最近の新しい生協の施設を案内してくれましたが、そのなかでも、かなり憮然とした表情で、施設について大学がこういうのでそうせざるをえなかった、というような話をしていました。生協というのはいつも受身で、業者みたいに扱われている、ということを訴えようとしているわけです。そのときも感じたのですが、生協職員も、大学生協がもつようになってきている新しい意味を自覚して、もっと大学の教職員や学生や院生と話し合いながら、有意味的に行動していくことが必要でしょう。

そういうことも含んで、皆さんにもぜひ、これからの大学生協の新しい意義と役割をあらためて自覚していただき、それぞれの地域で大学生協を活発化させていっていただきたいと思います。以上が私の挨拶です。